

# 韓国語における ㄷ이, ㄷ : 半世紀の違い(?)

深見兼孝

## 1. はじめに

韓国語には依存名詞としてのㄷ이とㄷ、語尾としてのㄷ이とㄷがあり、どちらもㄷ이の縮約形とされる。本稿は、50年ほどの差のある小説の間に、これらの分布に差が存在し、それが歴史的変化の反映である可能性を示唆しようとするものである。

## 2. 先行研究

허웅(1981)によれば、15世紀後半には「不完全名詞」としてのㄷ이とㄷ、‘흡사법’語尾のㄷ, それに、その後が続く하다と合体して派生したㄷ이が共存している。「不完全名詞」としてのㄷ이とㄷについて、その意味用法の説明はないが、例文において多く原文の「似」「若」の訳として当てられている。また、‘흡사법’については「흡사함, 따라서 때로는 비유를 나타내는 이음법(p.616)」と説明している。これから察するに、既に15世紀後半において、ㄷ이とㄷは、語尾としても依存名詞としても、現代語と同じとは言えないまでも類似した意味で用いられていたものと推測される。

しかし、허웅(1981)では語尾としてのㄷと「不完全名詞」としてのㄷ, および「不完全名詞」としてのㄷ이とㄷの時間系列上の派生関係には言及がなく、目下不明と言わざるを得ない。

現代語に目を移すと、김승곤(2009)は‘메인이름씨’の一つにㄷ을挙げ、同じく‘메인이름씨’の양とともに、「‘처럼’의 뜻을 나타내고(p.149)」と述べ、語尾としてのㄷ이については、「흡사함 즉 비유를 나타내는 어찌씨끝으로 …… ‘한(하는) 것 처럼, ‘한(하는) 것 같이’의 뜻으로 이해된다. 그런데 ‘ㄷ이’는 경우에 따라서는 ‘ㄷ’과 같이 ‘이’가 줄어드는 수가 있다.(p.517)」と述べている。김승곤(2009)の記述は比較的簡単であるが、이희자・이종희(2010:480-490, 143-144, 329-330, 513)は詳しい。整理して言えば、依存名詞のㄷ이, ㄷは推量と比較(類似)の用法を持つということになる。ここで、推量と比較(類似)の違いは意味的緊密性の違いによると考えられる。推量は主節の状況から直ちに推測できる、もう一つの状況を述べたものであり、主節との意味的関連は強い。これに対し、比較(類似)はそれに比べると主節との関連は薄いと言えよう。また、同書は語尾としてのㄷ이, ㄷについて同一と比較(類似)の用法を挙げている。動詞や形容詞の語幹と直接結合するため、その

動詞、形容詞との意味的緊密性が増し、同一と解釈され、その同一性が破られれば、比較（類似）と解釈されるのであろう。ただし、この比較（類似）の用法は、「慣用的に用いられる」とされており、語尾が듯이, ㄷ가導く節の意味は本来の意味からずれが生じ、慣用的に固定されている。したがって、依存名詞としての듯이, ㄷ의比較（類似）用法と、語尾としての듯이, ㄷ의比較（類似）用法は区別される。

### 3. 方法

手持ちの韓国の小説の中から、1950年代から60年代初頭にかけての作品(A群)から、듯이, ㄷの依存名詞、語尾それぞれの使用回数と頻度を調べる。さらに、依存名詞の時は、先行する冠形詞形の類型毎に使用回数と頻度を調べる2000年代以降の作品(B群)についても同様のことを行い、両作品群における듯이, ㄷの分布状況を比較し、その違いを示すことで、50年ほどの間に変化が起こっていることを示唆したい。

表1はA群、表2はB群の作品の出版年と作家の生年を示したものである。A群の作者はいずれも日本の植民地時代に生まれ、作品出版時は30代から40代である。また、B群の作者も作品出版時は30代から40代である。

表1 作品と作家(A群)

作品	出版年	作家	生年
감정 있는 심연	1957	한무숙	1918
꺼삐딴 리	1962	전광용	1919
닿아지는 살들	1962	이호철	1932
생활적	1954	손창섭	1922
오발탄	1959	이범선	1920
잉여인간	1958	손창섭	1922
젊은 느티나무	1960	강신재	1924
홍남철수	1955	김동리	1913

表2 作品と作家(B群)

作品	出版年	作家	生年
나가사키 파파	2008	구효서	1957
도시는 무엇으로 이루어지는가	2009	박성원	1969
두근두근 내 인생	2011	김애란	1980

설계자들	2010	김언수	1972
아랑은 왜	2010	김영하	1968
아름다움이 나를 멀시한다	2007	은희경	1959

## 4. 結果

### 4-1 全体の分布

表3 全体の分布(A)

	듯이	듯	計
依存名詞	36.6 (63)	7.6 (13)	44.2 (76)
語尾	23.3 (40)	32.6 (56)	55.8 (96)
計	59.9 (103)	40.1 (69)	100.0 (172)

表4 全体の分布(B)

	듯이	듯	計
依存名詞	12.1 (70)	44.2 (256)	56.3 (326)
語尾	6.6 (38)	37.1 (215)	43.7 (253)
計	18.7 (108)	81.3 (471)	100.0 (579)

表3はA群から、表4はB群からの依存名詞としての듯이, 듯と語尾としての듯이, 듯それぞれの出現回数の合計出現回数に対する百分率を示したものである(カッコ内は実数)。A群においてもB群においても、これら4つの形態素の出現率は均等ではない。A群(表3)を見ると、依存名詞としては듯이が使用される傾向がはっきり出ており、語尾としては듯が使用される傾向があるが、語尾듯이との差はあまり大きくない。結果的に依存名詞の듯と語尾の듯をあわせた出現率(40.1%)は듯이のそれ(59.9%)の7割に満たず、듯이の方がよく用いられている。これに対し、B群(表4)では依存名詞としても語尾としても、듯이より듯の方が使用される傾向が、はっきり見える。まず、依存名詞の듯と語尾の듯をあわせた出現率は、B群(81.3%)ではA群(40.1%)の二倍近くになり、듯이の方はB群(18.7%)ではA群(59.9%)の3割弱である。とりわけ、依存名詞としての듯はB群での出現率(44.2%)がA群での出現率(7.6%)の6倍近くになり、語尾としての듯이はB群での出現率(6.6%)がA群での出現率(23.3%)の3割程度になっている。

### 4-2 冠形詞形の分布

表5はA群から、表6はB群からの依存名詞としての듯이, 듯と各々を修飾する冠形詞形(語尾で表示)との組み合わせの数の割合を冠形詞形ごとに示したものである。

丸カッコ内は実数、冠形詞形語尾<sup>ㄱ</sup>の行における丸カッコ内の[ ]は、語幹に直接<sup>ㄱ</sup>のついた冠形詞形（以下「単純<sup>ㄱ</sup>冠形詞形」）の修飾を受ける<sup>ㄱ</sup>이, <sup>ㄱ</sup>의の出現数で内数である。

表5 冠形詞形の分布(A)

	ㄱ이	ㄱ	計
ㄴ	35.5 (27)	5.3 (4)	40.8 (31)
ㄴ	30.3 (23[4])	10.5 (8[8])	40.8 (31[12])
ㄷ	1.3 (1)	0.0 (0)	1.3 (1)
ㄹ	15.8 (12)	1.3 (1)	17.1 (13)
計	82.9 (63[4])	17.1 (13[8])	100.0 (76[12])

表6 冠形詞形の分布(B)

	ㄱ이	ㄱ	計
ㄴ	6.1 (20)	23.0 (75)	29.1 (95)
ㄴ	12.3 (40[4])	50.6 (165[11])	62.9 (205[15])
ㄷ	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)
ㄹ	3.1 (10)	4.9 (16)	8.0 (26)
計	21.5 (70[4])	78.5 (256[11])	100.0 (326[15])

A群(表5)ではどの冠形詞形についても<sup>ㄱ</sup>이の出現率が高いのに対し、B群(表6)では、出現のない<sup>ㄷ</sup>を除いてどの冠形詞形についても<sup>ㄱ</sup>の出現率が高い。単純<sup>ㄱ</sup>冠形詞形について言うと、その<sup>ㄱ</sup>冠形詞形のうちでの使用は、A群では<sup>ㄱ</sup>이の時23例中4例(17.4%)、<sup>ㄱ</sup>の時8例全て(100%)、全体としては31例中12例(38.7%)であるのに対し、B群では<sup>ㄱ</sup>이の時40例中4例(10%)、<sup>ㄱ</sup>の時165例中11例(6.7%)、全体としては205例中15例(7.3%)である。A群とB群を比較すれば、単純<sup>ㄱ</sup>冠形詞形の<sup>ㄱ</sup>冠形詞形中の使用は、<sup>ㄱ</sup>이を修飾する時もB群での出現率が少ないが、<sup>ㄱ</sup>을を修飾する時はB群での出現率が著しく少ない。B群では<sup>ㄱ</sup>冠形詞形+<sup>ㄱ</sup>だけでも全体の過半数を占めているが、そのうち単純<sup>ㄱ</sup>冠形詞形の使用は6.7%に過ぎず、A群で<sup>ㄱ</sup>冠形詞形+<sup>ㄱ</sup>の8例全てが単純<sup>ㄱ</sup>冠形詞形であるのと対照的である。

<sup>ㄱ</sup>冠形詞形のうち、単純<sup>ㄱ</sup>冠形詞形以外の形は引用形を基盤にした<sup>ㄱ</sup>引用冠形詞形である。この形は引用形を基盤にしているので、主節の表す状況から、その時の主節の主体の考えや意図など内面を推量する用法を持つ。結局、<sup>ㄱ</sup>引用冠形詞形はA群では<sup>ㄱ</sup>이を修飾する時には見られないが、全体的には単純<sup>ㄱ</sup>冠形詞形より頻繁に用いられ、B群では全面的に単純<sup>ㄱ</sup>冠形詞形より頻繁に用いられている。

なお、B群では<sup>ㄹ</sup>冠形詞形は<sup>ㄱ</sup>이と<sup>ㄱ</sup>の使用頻度の差が少なく、全体に占める使用頻度も8.0%と少ない。これは、A群における<sup>ㄹ</sup>冠形詞形の使用率の半分以下である。

## 5. 示唆

前節でA群に比べB群ではㄹ의使用が多いこと、ㄹ引用冠形詞形の使用が多いこと、ㄷ冠形詞形の使用が少ないことを示した。これらは 50 年ほどの違いのある小説から見た違いであり、歴史的な変化の反映である可能性がある。すなわち、B群ではA群に比べㄹ의使用が増加しているのは、ㄹ冠形詞形がㄹを修飾するというパターンが増えているのと連動していると言える。しかし、実際は単純ㄹ冠形詞形の使用は減少していた。増加しているのはㄹ冠形詞形のもう一つの形態である引用冠形詞形がㄹを修飾するというパターンである。これは、主節の表す状況から、その時の主節の主体の考えや意図など内面を推量する用法が増えてきていることを意味する。さらに、その根本にはㄹ全体の使用の増加があり、長形(ㄹ이)が短縮(摩耗)していつていると解釈できる。また、依存名詞としてのㄹ이, ㄹの用法は、推量用法はもちろん比較(類似)用法でも、話し手の推測を基盤にしているので、ㄷ冠形詞形の推量的意味とだぶっている。ㄷ冠形詞形の用例はA群でも少なかったが、ますます使用されなくなっているとしても不思議はない。

これに対し、A群とB群に現れた差は、歴史的変化の反映ではなく、両群の小説の文体の差を反映しているという反論が考えられる。確かにA群とB群の小説は、手元のものを使ったために、テーマの上でも、特にA群が小規模で量的にも均衡が取れているとは言えない。可能性として示唆するにとどめ、今後の研究を期したい。

## 参考文献

김승곤(2009) 21 세기 우리말본 연구. 경진

이희자·이종희(2010) 한국어 학습 전문가용 어미·조사 사전. 한국문화사

허웅(1981) 우리 옛말본 15 세기 국어 형태론. 샘 문화사